

間久右衛門・佐久間葵之助・梶原彌三郎・水野源太郎・水岡小三郎六人鍵を合候。其晚勝曼院の山にて不干が内、志水又市・江原彌助・湯見藤助・長瀬彌五左衛門四人鎗合申候。長瀬は只今小右衛門と申、加賀に罷在候由申上候。家康公聞召、扱々利常は能兵をかへ持候と上意也。小右衛門は黒母衣に、銀の牛の舌の出しにて、勝曼院にて鎗を合す。後門跡降參候。大坂の城衆、寄手小屋見物に出で長瀬が小屋印に、銀の牛の舌の黒母衣を見付、日外鎗を合たる母衣爰に在とて、小屋前に群を成也。

可觀小説卷卅四

一、城千世夢得の歌

我ぞとは名乗ずとても梅の花色をも香をも空にしるらん
年を経てわすれ草のみ生ふる野に又しのべとや露の夕暮
右丙辰の年秋七月替者城千世夢得の歌也。

一、太宰春臺の糶賤行 享保二十年十二月誓

東土土民何勾々。始自孟冬至季冬。海内糶賤諸侯困。哀哉方今與農。群國近歲頻有年。粟米如土不直錢。迺詔有司議定價。號令數出紛々然。貴貨賤穀由上政。因循無人察。利病。號令愈出愈不行。黎民何以保性命。商家何親戚。士農何仇讎。末厚本却薄。一樂一憂愁。本末厚薄兩易處。冠履倒置皆失據。都鄙嗷々不聊生。在位肉食日暇豫。君不見農夫辛苦把鋤犁。秋成粟米如塗泥。已知樹穀徒費力。來年誰復事夏畦。天下求利相馳逐。那知金錢不如穀。一朝不炊終日飢。金錢寧充人口腹。冠冕君子胡然愚。皆道有錢斯有粟。群國粟米鉅萬々。何若舉棄之懸谷。不然口紅稻載去。遠向海外諸國鬻。愚哉有粟可金以買。一方無糶何所告。君不見

盈虛消息天道彰。年歲穰儉豈有常。安知今日如土米。不得後來餓者糧。勸君儲蓄民間粟。用待凶年救飢荒。

太宰純

右は東都處士太宰彌左衛門といふもの撰著すと也。彌左衛門は狄生惣右衛門弟子也。去年の冬米價を定られ、江戸・京・大坂三ヶ所の分は、石四拾一・二匁を限り下直に不仕様に賣買し、夫より高直に仕候分は不苦候。諸國準之候様にと嚴密成令下候得共、商家一圓心服不仕、彌米價下直に仕候て、畢竟天下の笑と成ぬ。今年二三月に至り終に其令も空しく相止候。其後又改貨の議起りて、都鄙頗る喧然として商買も不通に至りぬ。元祿年中寶永の初年の頃より、天下に偏蔓せし悪金銀世に所謂元字銀三寶銀四寶銀等享保四・五年迄に御精力を被用、悉く慶長の金銀同事に被改、再び祖宗以來の眞金銀に復し、萬民悦服せし所に、今茲丙春の春より又元祿・寶永の悪金銀に成りぬ。此事の張本は御勘定頭細田丹波守より主張し、老中松平左近將監執し沙汰せらるゝと云。

一、源平赤白の幡の事

平家は赤幡、源氏は白幡と天子より勅命といふ事は、何の